

大阪の淡路を巡る～名物に潜む淡路島～

山本 伸一

【目的】

2013年（平成25年）4月13日、淡路島で震度6弱の地震が発生。幸いにして死者はでなかったものの、15日には岬町深日港から救援物資を積んだ船が淡路島洲本港に入港し、淡路島側に引き渡された。大阪湾の東西両港を結ぶこのルートで物資が運ばれたのは、1999年（平成11年）に定期高速船が廃止されて以来のことで、かつての友好が活かされた結果であった。大阪～淡路島の定期船は『古事記』にも記されるほどの歴史があり、今日、大阪の文化や名物、名産などとされるものにも淡路島と影響し合っ生まれたものが多い。大阪と淡路島、対峙しながらも直接結ばれる定期航路が皆無となった現在、相互の意識の希薄化を食い止める意味でも、「大阪」に見え隠れする淡路島の影響とその軌跡を探り、魅力再発見につなげたい。

【内容】

大阪と淡路島が相互に影響し合っ生まれた様々な文化、文物、ゆかりの人物などを紹介する。中でも人形浄瑠璃は、一時危機に陥った際も互いに支え合っ乗り越え、全国の人形浄瑠璃でプロ役者のみが演じる団体は、大阪と淡路島だけとなっている。しかし、現在、両者の表立った大きな交流は見えない。大阪においても、人形浄瑠璃文楽の本拠地といつつ、土産物などで文楽に関するものを見ることはほとんどなく、人形浄瑠璃の印象は薄い。大阪と淡路島の重要な役割として、人形浄瑠璃に対する認知度を底上げしていくための連携なども考えられるのではないだろうか。

【結果（今後の考察）】

淡路島からの観光誘客は人口ボリュームからしても経済的メリットは少ない。しかし大阪湾岸という共通項で大阪と淡路島の一体感と回遊性を高めることは、万一の災害時等の支援・協力にも有効に働き、京阪神のくくりとはまた違った視点で、大阪の魅力を再発見できるものがあるとわかったので、今後とも考えていきたい。

（参考）

- ・『浪花百景—いま・むかし—』 大阪城天守閣 1995年（平成7年）
- ・『伝統芸能淡路人形浄瑠璃』 財団法人淡路人形協会編
兵庫県三原郡三原町教育委員会（現・南あわじ市） 2002年（平成14年）
- ・「淡路人形浄瑠璃・引田家資料」 南あわじ市教育委員会所蔵

1. 大阪の名所・名物に潜む淡路島 (一例)

安政年間(1854-1860)出版『浪花百景』の「生玉絵馬堂」(国員画)には、生國魂神社から大阪湾を望み、淡路島まで描かれている。古代、上町台地のすぐ西側までが海で、難波八十島と呼ばれる多数の島が点在していた頃、その島々の向こうに大きく横たわる淡路島は母なる姿を想像させた。国生み神話が島生み神話とされる所以もうなずける。「記紀」には兎寸川(とのかかわ・高石付近か)西の淡路島まで木陰を差すという高木を切り倒して船に仕立て、朝夕その船に淡路島の聖水を積み、高津宮の仁徳天皇のもとへ献じ届けたという記述があり、古代から大阪と淡路島は何か特別な関係を持ち合わせていたのかもしれない。

①「中座」と「芝右衛門狸」

現在、生國魂神社の摂社、源九郎稻荷社に狸が合祀されている。1999年(平成11年)に閉館した中座に祀られていた芝居の神、芝右衛門狸で淡路島洲本の三熊山に棲んでいたとされる。芝居好きの狸で武士に化け淡路島から道頓堀へ芝居見物に通ったが、不審に思った芝居小屋の主人が放った犬に見つかりかみ殺される。これ以後、芝居の客が減り、芝右衛門の祟りだとして芝居の神として祀ったところ客が戻ったという。中座跡は、中座くいだおれビルとなり、くいだおれ人形が立つ。

②「くいだおれ人形」と「人形師、二代目由良亀」

くいだおれ人形の動く仕組みは文楽人形をヒントに製作されたといわれる。淡路人形から文楽人形に移った淡路島由良出身の人形師、二代目由良亀の作。文楽自体も淡路島の植村文楽軒の名に由来する。

③大阪で活躍する淡路島出身者

くいだおれ人形のある道頓堀や戎橋のフレーズが出る大阪メロディーの代表と言えば、海原千里・万里の「大阪ラブソディー」。海原千里は、今は上沼恵美子として大阪のおばちゃんというイメージが強いタレントだが淡路島福良出身。昆布の小倉屋の松原久右衛門・小倉屋山本の山本利助も淡路島出身。

④こだわりの「食」と「淡路玉葱」

551の豚まん・一芳亭のしゅうまい・心齋橋コロッケ・大寅の練り天などに使われる玉葱は淡路玉葱を使うこだわりがある。

このように大阪ならではと思われているものをミナミ中心にみても、その背景に淡路島が潜んでいるものは幅広い。その中で今回は深い関係がありながらも、大阪と淡路の双方が表立って関係性にあまり触れていないと感じている人形浄瑠璃を中心に取り上げる。



①洲本八幡神社の芝右衛門像



①藤山寛美ら寄進の芝右衛門祠(三熊山)



①生國魂神社摂社の源九郎稻荷社



②淡路島に残る由良亀の作品 かしらと由良亀焼印の心串
(南あわじ市教育委員会収蔵庫内にて、山本撮影)



②由良亀製作 くいだおれ太郎
(「くいだおれ太郎のつぶやき」より写真抜粋)

2-1. 大阪でヒットし、淡路島から全国に広めた人形浄瑠璃

現在、全国でプロ役者のみで人形浄瑠璃の定期公演を行う団体は、人形浄瑠璃文楽（(公財)文楽協会・大阪市中央区）と淡路人形浄瑠璃淡路人形座（(公財)淡路人形協会・兵庫県南あわじ市、以下淡路座と略）の2団体のみであり、全国各地に地域の伝統芸能として伝わる人形芝居の多くは、文楽系、淡路系に大別される。

文楽という名称は、淡路島仮屋から大阪に移住した植村文楽軒の一座に由来する。大阪では竹本義太夫の義太夫節と近松門座左衛門の作品を取り入れた人形浄瑠璃芝居がヒットし、竹本座と豊竹座などが競合、派生、盛衰を経て文楽座が中心的存在となり人形浄瑠璃そのものを文楽と称するようになった。一方、淡路島は、西宮神社に属した人形操りによる神事を行う傀儡師や戎かきが淡路島を拠点に独立。1570年（元亀元年）、淡路島の引田淡路掾が宮中で三社神楽（式三番叟）を奉納し、繪旨を賜ったのを淡路人形の起源とする。この繪旨は淡路の人形遣いが全国を巡ること可能にし、のち大阪でヒットした人形浄瑠璃を取り入れた巡業する形式の座へと変化。大阪以外の地方の人々へも大阪で人気の人形浄瑠璃を披露することとなる。

享保年間(18世紀)には淡路島に40以上の座元が存在し、地元淡路島にあまり滞在することなく全国を巡業する。現在の淡路人形座は唯一残った吉田傳次郎座の流れを汲むものである。天保改革（1842年）期には興行が制限され、大阪では多くの文楽役者が失業に見舞われるが、淡路座は阿波徳島藩の保護政策もあって影響少なく、追抱（おいだき）と称した特別出演で文楽の役者を抱えた。

また大阪空襲で多くの人形や道具を焼失した文楽座に100体余りの人形と衣装を無償貸出して公演断絶を救ったのが淡路島洲本の医師、松谷辰造。二代桐竹紋十郎に師事し、復興のため精力的に人形製作に取り組む大江巳之助の若き時代の後援者でもあった。

このように、大阪と淡路島が影響し合って拡大し、時として危機を乗り越え支え合ってきたものは、人形浄瑠璃に象徴されるといっていい。

2-2. 地域に根付く淡路人形浄瑠璃

特に外国人客の多い土産物店で、歌舞伎グッズを見かけるようになったが、文楽グッズは本拠地大阪であってもほとんど見かけない。これは広域的で相乗的な効果が予想されるにもかかわらず、文楽が他の人形芝居全般と結びついていないからではないか。私自身、大阪で生まれ育ったが、大阪で文楽に触れたことがなく、淡路島に移り住んで触れた淡路人形浄瑠璃から大阪の文楽を意識するようになった。

淡路島、特に南部地域では、春のだんじり祭り（といっても淡路島のだんじりは、大阪で言う布団太鼓。地車ではない）で「だんじり唄」という唄を披露する。「だんじり唄」として口ずさんでいるのは浄瑠璃の一節。各々の祭礼団が「義経千本桜」などの浄瑠璃作品からの抜き出しを20分近く、各々異なる節を順番に半日以上はかけて語る。この地域では保育園児の頃から、浄瑠璃と意識せずとも、浄瑠璃をだんじり唄として習う。私は淡路島に来るまで淡路人形浄瑠璃さえ知らなかったが、ここは好きも嫌いも浄瑠璃があるのが普通の存在で、子供会、小中高校、社会人に至るまで人形浄瑠璃のクラブがあり、世代や市域を超えた広がりを持つ。大阪市内にも高津小学校に文楽のクラブがある例もあるが、学校単体での取り組みであり、地域全体に広がっている活動ではない。昨年、淡路人形協会が南あわじ市内の小中学生に対して行ったアンケート調査によると、淡路人形浄瑠璃を人形座の舞台で見たことがあると答えたのは、小学生で約3割・中学生で約5割もある。ここから、淡路島南部地域は親子も関係なく、人形浄瑠璃に触れる機会が多い、特異な地域であると思われる。

2-3. 人形浄瑠璃の認知度向上に向けた提言

その一方で、かつて淡路座が巡業した大阪以外の地域とは現在も交流が行われているにもかかわらず、文楽とは大きな交流もなく、淡路座、文楽ともにテリトリーにこだわり、人形浄瑠璃全体として広域で盛り上げる機会を失っているように思えてならない。一個人としては文楽が好きで大阪に鑑賞に行く淡路島民も多いと思うが、兵庫県が提唱する人形浄瑠璃街道は、阿波～淡路島～西宮止まり、全国人形サミットを開催しても文楽の参加がなく、淡路人形のサポーターなどが関係する文化団体は淡路座や兵庫県への遠慮からか、団体で文楽鑑賞には行かない雰囲気もある。一方、文楽側でも国立文楽劇場常設展示室に淡路島との関係に触れる展示さえない状態で、文楽と淡路座はまるで本家か元祖かで袂を分けた老舗のようになってしまっている。補助制度の仕組みなどによる行政の枠もあろうが、文楽、淡路座双方とも経営が安泰ならともかく、座元自体同士が交流を持つ動きをみせないそれぞれのサポーター同士の交流も難しく、人形浄瑠璃全体としての認知度底上げにもつながらないのではないかと考える。

3. 大阪（岬町深日）～淡路島（洲本）航路 復活を機に交流連携を

2014年（平成26年）、岬町が1999年（平成11年）に廃止された深日～洲本の高速船航路を、今後復活させる方針を示した。既に和歌山の観光協会などが淡路島に向けて友ヶ島などへの観光客誘致を図る動きをみせているが、大阪側からのアプローチはまだ聞かない。友ヶ島と淡路島では戦前の由良要塞などのつながりがあるが、大阪と淡路島では、人形浄瑠璃を絡めた連携で相互の誘客を図ってみてはどうか。

南海電鉄汐見橋駅改札口に昭和30年代の沿線観光案内図が当時のまま掲げられている。損傷激しく読みづらくなっているが、当時は淡路島・徳島方面航路との接続路線であったため、淡路島・徳島も沿線として、淡路島には淡路鉄道の路線も描かれている。淡路鉄道（現 淡路交通㈱の前身）は、1922年（大正11年）から1966年（昭和41年）の廃止まで淡路島洲本を起点に運行され、南海線とは洲本航路を挟んで結ばれていた。1948年（昭和23年）には電化が完成し、南海電鉄の車両を導入した。

淡路鉄道電化完成時、洲本駅で記念祝賀会が催され、人形浄瑠璃が披露された。その人形遣いの一人が文楽で女方一筋として現在も活躍する桐竹紋壽（もんじゅ）（1934年（昭和9年）洲本生まれ）である。幼い頃から淡路人形浄瑠璃に触れ、淡路島の小林六太夫座により設立された淡路乙女座の初披露がこの祝賀会だった。1930年（昭和5年）、桐竹智恵子に始まる大阪乙女文楽座が一人遣いに対し、淡路乙女座は、伝統の三人遣いを保持し、女性と未成年男子のみで演じた。唯一の男子がのちの紋壽氏であった。折しも淡路鉄道電化と同年、松竹直営だった文楽は組合側と分裂し、組合側の三和会に属する二代桐竹紋十郎の一座が引越興行として洲本玉尾座で出張公演を行った。1950年（昭和25年）、紋壽氏は紋十郎の誘いで入門、文楽に移る。のち一時、父親の友人が淡路交通社長という縁で「洲本駅の駅ビル屋上に人形舞台を作る」と誘われ淡路交通に勤務するが続かず、再び紋十郎の元へ戻る。

ここ数年、文楽でも淡路座でも早替りなど途絶えた技芸の復活がある。早替りは、舞台上で御簾などに一時隠れた人形と人形遣いの衣装が出てきたときに変わっているという瞬時の芸。文楽座では1892年（明治24年）を最後に途絶え、淡路座では遅くとも1957年（昭和32年）頃まであったとされる。淡路座でのみ残っていた時の早替りを見ていたのが紋壽氏であり、淡路座で早替り復活指導にも当たった。

4. 交通手段の「早替り」「復活」による、関係強化を

そこで人形浄瑠璃の「早替り」「復活」に掛けて、交通手段も「早替り」「復活」で連携してはどうか。

2014年（平成26年）、三回目を迎えた「深日港フェスティバル」で一日だけの深日～洲本航路復活があった際、廃止前の航路を知る淡路島民からは「遠足や子供会でみさき公園に行ったなあ」という声が聞かれた。淡路島・岬町間は陸路では大阪湾をほぼ一周するため、片道3時間半程度かかり、そこまでかけてみさき公園に行くことはなくなっていたが深日航路の「復活」でみさき公園も日帰り目的地として「早替り」するだろう。

また、文楽劇場も近い難波から、深日港まではかつての淡路連絡急行「淡路号」を「復活」させれば、淡路島ルートに「早替り」する。列車名称は「淡路号」の名にこだわらず、大阪と淡路島に繋がりのあるくいだおれ太郎や芝右衛門狸に関連した名称を付けてもよい。人形浄瑠璃を沿線住民や鉄道ファンなどに広めるためにも、車両や船にこれらの人形が乗り込み、到着先の各地での文楽と淡路座のリレー形式の競演や追抱（特別出演）を復活させることが考えられる。

これらの取組みが実現すれば、両サポーターや人形浄瑠璃クラブの交流が生まれ、人形浄瑠璃を通して結ばれることで、他の分野でも大阪と淡路島が相互影響し合いながら、各々の魅力を再発見する一助となることを期待したい。

祝言		大入叶		千秋楽	
玉藻前	呼物早替り	播州皿屋敷	呼物早替り	忠臣蔵五段目	呼物早替り
八世松田有	八世松田有	千本櫻下り	千本櫻下り	山六之助	山六之助
伊賀越前守	伊賀越前守	先代お節	先代お節	利生	利生
谷三右衛門	谷三右衛門	三郎七郎	三郎七郎	歌	歌
州本合邦	州本合邦	三郎七郎	三郎七郎	雀	雀
春	春	文	文	田	田
花	花	生	生	友	友
玉	玉	樂	樂	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	頼
花	花	正	正	朝	朝
玉	玉	風	風	公	公
花	花	正	正	源	源
玉	玉	風	風	頼	